



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第二十二卷

河出書房版

現日小本說大系 第二十一卷

昭和二十七年一月二十五日 初版印刷
昭和二十七年一月三十一日 初版發行

著者 水上瀧太郎
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

集者 荒正人
日本近代文學研究會
東京都品川區大井町一四三〇番地

印刷者 小田茂作
東京都品川區大井町一四三〇番地

發行所 河出書房
東京都千代田區神田小川町三八番地

電話神田(25) 二三四七番
三二七四番

目次

水上瀧太郎

山の手の子

四

大阪の宿

二七

久保田万太郎

朝顔

一三〇

ふゆぞら

一四四

末枯

一六五

小山内 薫

父の否定

一九四

色の褪めた女……………二〇八

TOKIOの消印……………二〇八

木下杢太郎

荒布橋……………二二五

六月の夜……………二二五

解 説（荒 正人）……………二四五

水上瀧太郎

山の手の子
大阪の宿

山の手の子

お屋敷の子と生れた悲哀を、沁み々と知り初めたのは何時からであつたらう。

一日一日と限り無き喜悅に満ちた世界に近付いて行くのだと、未來を待つた少年の若々しい心も、時の進行に連れて何時かしら、何氣なく過ぎて來た歸らぬ昨日に、身も魂も投出して追憶の甘き愁に耽り度いと云ふ果敢無い慰藉を弄ぶやうになつてから、私は私に何時も斯う尋ねるのであつた。

山の手の高豪もやがて盡きようと云ふだらだ坂を丁度登り切つた角屋敷の黒門の中に生れた私は、幼き日の自分を其黒門と切離して想起すことは出來無い。私の家を終りとして丘の上は屋敷門の薄暗い底には何物が潜んで居るやうに、牢獄のやうな大きな構造の家が嚴めしい塀を重ねて、何處の家でも廣く取圍んだ庭には鬱蒼と茂つた樹木の間に春は梅、櫻、桃、李が咲揃つて、風の吹く日には何處の家の梢から散るのか見も知らぬ種々の花が庭に散り敷いた。そればかりではない。もう二十年も前に其の丘を去つた私の幼い心にも深く沁み込んで忘れられないのは、寂然した屋敷々々から、花の頃月の宵などには申合せたやうに單調な懐い、古びた琴の音が洩れ聞えて淋しい涙を

誘ふのであつた。私は斯うした丘の上に生れた。靜寂な重苦しい陰鬱な此の丘の端れから狭いだらだ坂を下ると、カラリと四圍の空氣は變つてせゝこましい、軒の低い家ばかりの場末の町が帶のやうに繁華な下町の眞中へと續いて居た。

今も靜に眼を閉て昔を描けば、坂の兩側の小さな、つましやかな商家がとびとびながらも瞭然と浮んで來る。赤々と充た、肥つた翁が丸い鐵火鉢を膝子のやうに抱いて、睡た相に店番をして居た唐物屋は、長崎屋と云つた。其頃の人々には未だ見馴れなかつた西洋の帽子や、肩掛や、リボンや、種々の派手な色彩を掛連ねた店は子供的眼には寧ろ不可思議に映つた。其店で私は、動物、植物或は又滑稽人形の繪を切つて湯に浮かせ、つぶつぶと紙面に汗をかくのを待つて白紙に押付けると、其の獸や花や人の繪が綺麗に映る西洋押繪と云ふものを買ひに行つた。

「坊ちゃん。今度はメリケンから上等舶來の押繪が参りましたよ。」

と禿頭は玻璃棚からクルクルと卷いたのを出しては店先に置けた。子供には想像も付かない遠い遠いメリケンから海を渡つて來た奇妙な恩藉品を私は何んなに憧憬を以て見たらう。油繪で見る様な天使が大きな白鳥と遊んで居る有と有ゆる美しい花鳥を集めた異國を想像して何んなに懐かしみ焦れたらう。唐物屋在來の獨樂、風、太鼓、そんな物に飽た御屋敷の子は珍物好の心から烈しい異國趣味に陥つて何でも上等舶來と云はなけば喜ばなかつた。長崎屋の筋向の玩具屋の、私はいゝ花客だつた。洋刀、喇叭、鐵砲を肩に、腰にした坊ちゃんの男らしい姿を

坂下の子等は何んなに羨しく妬しく見送つたらう。何時だつたか父母が旅中御祖母様と御留守居の御褒美に西洋木馬を買つて頂いたのも其の家であつた。白斑の大きな木馬の鞍の上に小さい主人が、兩足を踏張つて跨がると、白い房々した鬘を動かして馬は前後に揺れるのだつた。

「マア、玩具にまで何兩と云ふ品が出来るのですかねえ、今時の子供は幸福ですねえ。」

と御祖母様はニコニコして見ていらつしやつた。玩具屋の側を次第に下つて行くと坂の下には繪雙紙屋が在つた。此の店には千代紙を買ひに行く、私の姉のやっほさんの姿も屢々見えた。芳年の三十六怪選の勇しくも物恐ろしい妖怪變化の繪や、三枚續の武者繪に、乳母や女中に手を曳かれた坊ちやんの足は幾度もその前で動かなくなつた。就中忘れられないのは古い錦繪で、誰の筆か瀧夜叉姫の一枚繪。私が誕生日の祝物に何が欲しいと聞かれて、彼と答へたので散歩がてらに父に連れられて行つた時「之は賣物では御座いません」と六ヶしい顔の亭主が云つてから亭主を憎いと思ふよりも一層姫の美しい姿繪が懐しくなつた。其他其處らには呉服屋、陶器屋、葉茶屋、なぞがあつたやうだが私はそれらに付て懐しい何の思ひ出も無い。坂下も亦繪雙紙屋の側の熊野神社、それと向合つた柳の木に軒燈の隠れた小さな煙草屋の外は矢張り記憶から消えて了つたけれども其の小さな煙草屋の玻璃棚が並べられて、僅に板敷を残した店先に、私の幼かつた姿が瞭然と佇むのである。

私の生れた黒門の内は、家も庭もしめじめと暗かつた。さる

旗本の古屋敷で、往來から見ても塀の上に蒼黒い樹木の茂りが家を隠して居た。可成廣い庭も、大木が造る影に全體蒼蒸して日中も夜のやうだつた。それでも流石に春は植込の花の木が思ひがけない庭の隅々にも咲いたけれど、やがて五月雨の頃にもならうものなら絶間もなく降る雨はしとしと吾に沁みて一日や二日からりと晴ても乾く事ではなく、だゝつ廣い家の踏めばぶよぶよと海のやうに思はれる室々の疊の上に蛭蟪の落て匍ふやうなことも多かつた。物心つく頃から私は此の陰氣な家を嫌つた。そして時たま乳母の背に負はれて黒門を出る機会があると坂下のカラカラに乾き切つた往來で、獨樂廻しやメンコをする町の子を見て、自分も乳母の手を離れて、あんなに多勢の友達と一緒に遊び度いと思ふ心を強くするのみであつた。乳母は、「町つ子とお遊びになつてはいけません。」

と瘦せた蒼白い顔を殊更眞面目にして誡めた。何故といふ事は無しに私は町つ子と遊んでは不可ないものだと思つて居る程幼なかつた。其頃私は毎晩乳母の懷に抱かれて、竹取の翁が見付た小さいお姫様や、繼母にいちめられる可哀さうな落窪のお話を他人事とは思はず身にしてみても、時には涙を溢して聞きながら何時かしら寝入るのであつたが、或晩から私は乳母に添寝されるやうになつた。

「もう直き赤さんがお生れになると新様はお兄いさんにお成になるのですから、お母様に甘つたれていらつしやつてはいけません。」

と云ひ聞かされて、私は小さい赤坊の兄になるのを嬉しくは思つたが母の懷に別れなければならぬ事の悲さに涙ぐまれて

冷い乳母の胸に顔を押當てた。

間もなく母は寢所を出ない身となつた。家内の者は何かしら氣忙しきうちに、物言ひも聲を潜めるやうになり相手をして呉れる事もなくなつた。私の乳母さへも年役に、若い女のともすれば騒ぎたがるのを叱りながら、そのお立働いて居て私をば顧る事が少なくなつた。出産の準備に混亂した家の中で私は孤獨をつづく淋しいと思つた。お祖母様のお氣に入で夜も廊下續きの隠居所に寝る姉も、其頃習ひ初めた琴を弾く事さへ止められて、一人で人形を抱へては、遊び相手を欲がって常は疳癪を恐れて避けて居る弟をもお祖母様の傍に呼んで飯事の且那樣にするのであつたが、それも直きと私の方で飽が来てふとしたことから腕白が出ては姉を泣かすのでお祖母様や乳母に叱られる種となつた。腕白盛の坊ちゃんは「靜にしていraftしやい」と云はれて人氣の少ない、室の片隅に手遊品を並べても少時經つと厭になつて忙しい人々に相手を求めるので「ちつとお庭にでも出てお遊びなさい」と家の内から追ひ立てられる。

黒土の上に透間も無い沓は木立の間に形ばかり付いて居た小道をも埋めて踏めばじとじと音も無く水の湧出る小暗い庭は、話に聞いた種々の恐ろしい物の住家のやうに思はれ、自由に遊び廻る氣にはなれないので縁近い處で滿ちなくすくむで居た。けれども次第に馴れて來ると未だ見ぬ庭の木立の奥が何となく心を引くので、恐々ながらも幾年か簞目も入らずに朽敗した落葉を踏んでは、未知の國土を探索する冒險家のやうに、不安と好奇心で日に日に少しづつ繁つた枝を潛り／＼奥深く進入るやうになつた。手入をしない古庭は植物の朽た匂ひが充て居

た。數知れぬ羽蟲は到る所に影のやうに飛で居た。森閑として木下闇に枯葉を踏む自分の足音が幾度か耳を脅した。蜘蛛の巢に顔を包まれては土蜘蛛の精を思ひ出して逃げかへつた。然し斯うして踏馴た道を知らず／＼に造つて私は遂に我家の底の奥底を究めたのであつた。暗緑のしめつばい木立を抜けるとカラリと晴た日を充分に受けて、其處はまばらに結つた竹垣も何時か倒れては居たが垣の外は打立てたやうな崖で、眼の下には坂下の町の屋根が遠く迄晝の光の中に連つて居る。その果てに品川の海が眞蒼に輝いて居た。今迄思ひもかけなかつた眼新しい、廣い景色を自分一人の力で見出した嬉しさに私は雨さへ降らなければ毎日一度は必ず崖の上に小さい姿を現はすやうになつた。そして馴るに従つて日一日と何かしら珍しい物を發見した。熊野神社の大鳥居も見えた。三吉座といふ小芝居の白壁に幾筋かの鼻負幟が風に吹かれて居るのを、一様に黒い屋根の間に見出した時は殊に嬉しかつた。芝居好きの車夫の藤次郎が父の役所の休日には私の守をしなが

ら、「乳母には祕密ですぜ。」

と云つては肩車に乗せて其の三吉座の立見に連れて行く。父母と共に行く歌舞伎座や新富座の緋毛氈の美しい棧敷とは打つて變つて薄暗い鐵格子の中から人の頭を越して覗いたケレン澤山の小芝居の舞臺は子供の目には反つて不思議に面白かつた。殊に大向ふと云はず土間も棧敷も一齊に鼻負々々の名を呼び立て、若しか敵役でも出ようものなら熱誠を籠めた怒罵の聲が場内に充滿になる不秩序な賑やかさが心も躍るやうに思はせたのに違ひない。私は藤次郎の云ふまゝに乳母には隠れて度々連れ

て行つて貰つたものだつた。静寂な木立を後にして崖の上に立て居ると芝居の内部の鳴物の音が瞭然と耳に響くやうに思はれて彼の坂下の賑はひの中に飛で行き度い程一人ぼつちの自分がうら淋しく思はれた。

それは確に早春の事であつた。日毎に一人で訪つれる崖には一夜の中に著しく延びて緑を増す雑草の中に見る限り、いた草の花が咲いて居た。其草の中にスクスクと拔出た虎杖を取る爲に崖下に打續く裏長屋の子供等が、峻しい崖の草の中をがさがさあさつて居た。小汚ない服装をした鼻垂しではあつたが犬のやうに輕快な身のこなしで、群を作つて放肆に遊び廻つて居るのが遊相手の無い私には何んなに懐しくも羨しく思はれたらう。足の下を覗くやうに崖端へ出て、自分が一人ぼつちで立つて居る事を子供等に知つて貰ひ度いと思つたが此方から聲を掛ける程の勇氣もなかつた。全く違つた國を見るやうに一舉一動の掛放れた彼等と、自分も同じやうに振舞ひ度いと思つて手の届く所に生えて居る虎杖を力充分に抜いて、子供達のするやうに青い柔い莖を噛んでも見た。しくしくと冷め度い酸い草の汗が蟲齒の虚孔に沁み入つた。

斯うした果敢ない子供心の遺瀾なきを感じながら日毎同じ場所立つ御屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて長屋の子等が崖下から認めた迄には、如何にかして、自分の存在を彼等に知らせようとする瓦を積んでは崩すやうな取り止めも無い謀略が幼い胸中に幾度か徒事に廻らされたのであつたが遂に何の手段をも自分からする事なく或日崖下の子の一人が私を

見付けてくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私を見るとさも吃驚したやうな顔をして仲間の者にひそひそと私語く氣配だつた。かき草の中を潜つて居た子供の顔は人馴れぬ獸のやうに疑深い眼付で一樣に私を仰ぎ見た。

其の翌日。もう長屋の子と友達になつたやうな氣がして、何日よりも勇んで私は崖に立つて待つて居た。やがてがやがや列を作つてやつて來た子供達も私の姿を見て怪しまなかつた。

「坊ちゃん、お遊びな。」

と輕く節を付けて昨日私を見付けた子が馴々しく呼んだ。私は何と答へていゝのか解らなかつた。

「町つ子と遊んではいけません」と云つた乳母の言葉を想起して何か大きな悪い事をしてしまつたやうに心を痛めた。それども、

「坊ちゃんお出でよ。」

と氣輕に呼ぶ子供に誘はれて、つい一言二言は口返へしをするやうになつたが惡戯子も、流石に高い崖を攀登つて來る事は出來ないので大きな聲で呼び交すより詮方が無かつた。

此様な日が續いた或日、崖上の私を初めて發見した魚屋の金ちゃんも表門から町へ出て來いと云ふ智慧を私に與へた。暫時は不安心に思ひ迷つたが遊び度い一心から牽婆や看護婦にまじつて乳母も女中達も産所に足を運んで居る最中を私の小さな姿は黒門を忍び出たのである。曾て一度も人手を離れて家の外を歩いた事の無かつた私は、烈しい車馬の往來が危つかしくて、折角出た門の柱に噛り付いて不可思議な世間の活動を臆病な眼で見て居るのであつた。

麗な春の晝は、勢よく坂を馳下つて行く俵の輪があげる輕塵にも知られた。目まぐるしい坂下の町を暫眺めて居ると天から地から滿ち溢れた日光の中を影法師のやうな一隊が横町から現はれて坂を上つて來た。

「坊ちゃんお遊びな。」

と遠くから聲を揃へて迎ひに來た町つ子を近々と見た時私は思はず門内に馳込んで了つた。汚ならしい着物の、埃まみれの顔の、眼ばかり光る鼻垂しは手手に棒切を持つて居た。

「坊ちゃん、お出でな皆で遊ぶからよ。」

中では一番年増の金ちゃん、尻切草履を引ずつて門柱に手を掛けながら扉の陰にかくれて恐々覗いて居る私を誘つた。坊ちゃん、の小さい姿は町つ子の群に取巻かれて坂を下つた。

間も無く私は兄になつた。其の當座の混雜は、私をして自由に町つ子となる機會を與へた。或は邪魔者の居ない方がかゝる折には結句いゝと思つて家の者は知つても黙つて居たのかも知れない。

比較的に氣の弱いお屋敷の子は荒々しい町つ子に混つて負を取らないで遊ぶ事は出来なかつたが彼らは物珍しがつて私をばちやほやする。私は又何をしても敵ひさうもない喧嘩早い子供達を恐いとは思ひつゝも窮屈な陰氣な家に居るよりも誰に咎められる事も無く氣儘に土の上を馳廻るのが面白くて、遊びに疲れた別れ際に「明日もきつとお出で」と云はれるまゝに日毎に其の群に加つた。

私達の遊び場となつたのは熊野神社の境内と柳屋と云ふ烟草屋の店先とであつた。柳屋の店には何時でも若い娘が坐つて居

た。何と云ふ名だつたか忘れてしまつたけれども色白の肥つた優しい女だつた。私は柳屋の娘と云ふと黄縞に黒襟で赤い帶を年が年中して居たやうに印象されて居る。弟の清ちゃん、私は私が一番の仲よしで町つ子の群の中では小さつぱりした服裝をして居た。そして私と清ちゃん、が年も背丈も誰よりも小さかつた。柳屋の姉弟にはお母さんが無く病身のお父さんが、何時でも奥で咳をして居た。店先には夏と限らずに縁臺が出してあつたもので、私達ばかりか近所の店の息子や小僧が面白づくの烟草をふかしながら騒いで居た。

「彼奴等は清ちゃん、の姉さんを張りに來てやがるんだよ。」と云ふ金ちゃん、の言葉の意味は解らぬながらも私は娘の爲に心を配はした。けれども果敢ない私の思ひ出の中心となるのは此の柳屋の娘ではなかつた。

都もやがて高臺の花は風も無いのに散盡す頃であつた。或日私は何時もの通り黒門を出て坂を小走りに馳下つた。其日に限つて私より先には誰も出て來て居ないので、私は暫く待つ積りで柳屋の縁臺に腰かけた。店番の人も見えなかつたが程無く清ちゃんが奥から馳出して來る。續いて清ちゃん、の姉さんも出て來て、

「オヤ、坊ちゃん一人ツきり。」

と云ひながら私の傍に坐つた。派手な着物を着て櫻の花簪をさして居た。私の頬にすれ／＼の顔には白粉が濃かつた。

「今日は皆遊びに來ないのかい。」

「エ、町内の御花見で皆で向島に行くの。だから坊ちゃん、

又明日遊びにお出で。」

娘は諭すやうに私の顔を覗き込んだ。

間もなく「今日は」と仇つばい聲を先にして横町から町内の人達だらう、若紫や娘がまじつて金ちゃんも鐵公も千吉も今日は泥の付かない着物を着て出て来た。三味線を擦いだ男も居た。「アラ、今丁度出掛けようと思つて居た處なの。如何もわざ／＼誘つて頂いて済みません。」

清ちゃんの姉さんはいそ／＼と立上つた。私は人々に顔を見られるのが氣まりが悪くてもじ／＼して居た。

「どうも扮装に手間がとれまして困ります。サア出掛けようぢやあがあせんか。」

と赤い手拭を四角に疊んで禿頭に載せたぢ／＼いが剽輕な聲を出したので皆一度に吹出した。

「厭な小父さんねえ。」

と柳屋の娘は袂を振上げて一寸睨んだ。

どや／＼と歩き出す人々にまじつた娘は「明日お出で」と云つて私を振向いた。

「坊ちゃんが行かないのかい、一緒にお出でよ。」

と金ちゃんやんが叫んだけれども誰も何とも云つて呉る人は無かつた。私は埃を上げてさんざめかして行く後姿を淋しく見送つて居ると、人々の一番後に残つて、柳屋の娘と何か私語き合つて居た、先刻「今日は」と眞先に立つて来た娘がしげ／＼と私を振かへつて見て居たが小戾して不意に私を抱き上げて何も云はないで頼りした。驚いて見上る私を蓮葉に眼で笑つて其のまゝ清ちゃんの姉さんと手を引合つて人々の後を追つて行つ

た。それが金ちゃんの姉のお鶴だと云ふ事は後で知つたが紫と白の派手な手綱染の着物の裾を端折つて紅の長襦袢がすらりとした長い脛に絡んで居た。銀杏返に大きな櫻の花簪は清ちゃん姉さんとお揃ひで襟には色染の櫻の手拭を結んで居た姿は深く眼に残つた。私は一人悄然と町内のお花見の連中が春の町を練て行く後姿が、町角に消える迄立盡したがそれも見えなくなると俄に取残された悲しさに胸が迫つて來て思はず涙が浮んで來た。

多數者の中で人々と共に喜び共に狂ふ事も出来ない淋しい孤獨の生活を送る私の一生は御屋敷の子と生れた事實から切離す事の出来無い運命であつたのだ。小さな坊ちゃんやんの姿は一人花見連とは反對に坂を登つて、やがて恨めしい黒門の中に吸はれた。

珍しい玩具も五日十日とたつ中には投出されたまゝ顧られなくなるやうに、最初の中こそ「坊ちゃん／＼」と囁き立てた子供も、やがて煙草屋の店先の柳の葉も甍び切つた頃には全く私に飽て了つて坊ちゃんやんは最早大將としての尊敬は失はれて金ちゃんの手下の一人に過ぎなかつた。

「何んでえ弱蟲。」

斯う云つて脛を張つて突かゝつて來る鼻垂しに逆らふ丈の力も味方も無かつた。けれども矢張毎日のやうに遊び仲間を求めて町へ出たのは小さい妹の爲に家中の愛を奪はれ、乳母をさへも奪はれたが爲に家を嫌つたよりもお鶴と云つた魚屋の娘に逢ひ度いためであつた。

子供の眼には自分より年上の人、殊に女の年齢は全く測る事が出来ない。お鶴も柳屋の娘も私には唯娘であつたとばかりで其年頃を明確と云ふ事は思ひも及ばない事に屬して居る。お鶴は烟草屋の柳の蔭の縁臺の女主人公であつた。色の蒼白い脊丈の割合に顔の小さい女で私は今、そのすなりとした後姿を見せ蓮葉に日和下駄を鳴らして行くお鶴と、物を云はない時でも底深く漂ふ水のやうな涼しい眼を持つたお鶴とを殊更瞭然と想ひ出す事が出来る。

きら／＼と暑い初夏の日がだらだら坂の上から眞直に流れた往來は下駄の齒がよく研えて響く。日に幾度となく撒水車が町角から現はれては、商家の軒下迄も濡して行くが、見る間に又乾き切つた白埃になつて了ふ。酒屋の軒には燕の子が嘴を揃へて巢に啼いた。氷屋が沙漠の緑地のやうに僅に涼しく眺められる。一日一日と道行く人の膚物が白くなつて行くと柳屋の縁臺は愈々賑やかになつた。振手を浴衣のお鶴も、街に影の落る頃きつと横町から姿を見せるのであつた。「今日は」と遠くから聲を掛けて若衆の中でも構はずに割込んで腰を下した。

「坊ちゃん。此處にいらつしやい。」

とお鶴は何時も私を其膝に抱いて後から頬すりしながら話の中心になつて居た。私はもう汗みづくになつて熊野神社の鳥居を廻つて鬼ごつこをする金ちゃんに従つて行かうとはしないので、よくは解らぬながらも縁臺の話聞いて居た。勿論話は近所の噂で符徴まじりのものだつた。「お安くないね」「御馳走さま」と云ふやうな言葉を小耳に挟んで歸つて、乳母に叱られた事もあつた。若い娘の軽い口から三吉座の評判も屢々出た。お

鶴は口癖のやうに、

「死んだと思つたお富たあ……お釋迦様でも氣がつくめえ。」

と一寸済ましてやる聲色は「ヨウ／＼梅ちゃんそつくり」と云ふ若者達の囁き中であつた。聞かされて私も時たま人の居ない庭の中などでは小聲ながらも同じ文句を繰返した。尾上梅之助と云ふ若い役者が三吉座を覗く場末の町の娘子をしてどんなにか胸を躍らせたものであつたらう。藤次郎の背に乗つた私は、「色男」

「女殺し」と云ふ若者のわめきにまじる「いゝわねえ」「綺麗ねえ」と、感激に息も出来ない娘達の吐息のやうな私語を聞き洩さなかつた。私も何時も綺麗な男になる梅之助が好きだつたけれど餘りにお鶴がほめる時は微かに反感を懷いた。

「平牛着馴た振袖から、髻も島田に由井ヶ濱、女に化けて美人局……。ねえ坊ちゃん。梅之助が一番でせう。」

と云つてお鶴は例のやうに頬を付ける。私は人前の氣恥かしさに、

「梅之助なんか厭だい。」

と云ふのだつた。實際連中は、お鶴が何時も私を抱いて居るので面白づくによく戲弄つた。

「お鶴は坊ちゃんに惚れてるよ。」

私は何かしら眞赤になつてお鶴の膝を拔出しようとするとお鶴は故意と力を入れて抱締める。

「左様ですねえ。私の旦那様だもの。皆焼いてるんだよ。」

「嘘だい／＼。」

足をばたばたやりながら擦付ける頬を打たうとする、その手を取つてお鶴はチュツと音をさせて唇に吸ふ。

「ア、ア、私は坊ちゃんに嫌はれて了つた。」

さも落膽したやうに云ふのであつた。

やがて今日も坂上におのみ残つて薄明も坂下から次第に暮初めると誰からともなく口々に、

「夕焼小焼、明日天氣になあれ。」

と子供等は歌ひながら彼處此處の横町や露路に遊び疲れた足を物の匂ひの漂ふ家路へと夕餉の爲に散つて行く。

「お土産三つて氣が済んだ。」

と背中をどやして逃出す素早い奴を追掛けてお鶴も「明日又お出で」と云つて、別れ際に今日の終りの頬擦をして横町へ曲つて行く。

私は何時も父母の前にキチンと坐つて、食膳に着くのになさへ掟のある、堅苦しい家に歸るのが何だか心細く、遠ざかり行く子供の聲を果敢ない別れのやうに聞きながら一人で坂を上つて黒門を這入つた。夕暮は遠い空の雲にさへ取止もない想を走せてしつとりと心もうちしめり譯もなく涙ぐまれる悲しい癖を幼い時から私は持つて居た。

玄關を這入ると古びた家の匂ひがブーンと鼻を衝く。駄々廣い家の眞中に掛かる燈火の光の薄らぐ隅々には壁蟲が死絶えるやうな低い聲で啼く。家内を歩く足音が水底のやうに冷めたく心の中へも響いて聞える。世間では最も楽しい時と聞く晩餐時さへ厳めしい父に習つて行儀よく笑聲を聞くこともなく終了になつて了ふ音楽の無い家の佗しきは又私の心であつた。お祖母様や乳母や誰彼に聞かされたお化の話は總て我家にあつた出来事ではないかと夜は何時でも微かな物音にさへ愕え易かつた。自

然と私は朝を待つた。町の子の氣儘な生活を羨んだ。

カラリと晴れた青空の下に物皆が動いて居る町へ出ると蘇生つたやうに胸が躍つて全身の血が勢よく廻る。早くも街には夏が漲つて白く輝く夏帽子が坂の上、下へと汗を拭きく消えて行く。殊更暑い日中を擇んで菅笠を被つた金魚屋が「目高、金魚」と焼付くやうな人の耳に、涼しい水音を偲はせる賣聲を競ふ後からだりと白く乾いた舌を垂して犬がさも肉體を持餘したやうについて行く。夏が來たく。其の夏の熊野神社の祭禮も忘れられない思ひ出の一頁を占めねばならぬ。

町内の表通りの家の軒には何處も揃ひの提灯を出したが屋根と屋根との打續く坂下は綺麗に花々しく見えるのに、塀と塀とは續いても隣の家の物音さへ聞えない坂上は大きな屋敷門に提灯の配合が悪く、反つて墓場のやうに淋しかった。そればかりか私の家などは祭と云つても別段何をするのでもないのに引替へて商家では稼業を休んでまでも店先に金屏風を立て、緋毛氈を敷き、曲りくねつた遠州流の生花を飾つて客を待つ。娘達も平生とは見違へる様に綺麗に着飾つて何かにつけてはれがましく仰山な聲を上げる。若衆子供は夫々揃ひの浴衣で威勢よく馳廻る。ワッショウ／＼と神輿を擔ぐ聲はたゞさへ汗ばんだ町中の大路小路に暑苦し聞える。斯う云ふ時に日頃町内から憎まれて居たり、祝儀の心附が少なかつたりした家は思はぬ返報をされるものだつた。坂上の屋敷へも鐵棒でガチャンガチャンと地面を打つて脅す奴を眞先に何れも酒氣を吐いてワッショイワッショイと神輿を擔ぎ込む。それをば、もう來る頃と待て居

て若く祝儀を出す又ワッショウ／＼と溫和く引上て行くが何時の祭の時たつたかお隣の大竹さんでは心付が少ないと云ふので神輿の先棒を板塀を減茶々々に衝破られた事があつたのを、我家も同じ目に逢はされはしないかと限りなき恐怖を以て私は玄關の障子を細目にあげながら乳母の袖の下に隠れて恐々神輿が黒門の外に明るい町へと引上て行くのを覗いたものだつた。子供連も手々に神輿を擦ぎ廻つて喧嘩の花を咲かせる。揃の浴衣に黄色く染めた麻絲に鈴を付けた襷をして、眞新しい手拭を向ふ鉢巻にし、白足袋の足にまでも汗を流してヤッショウヤッショウと馳出すと背中の鈴がチャラチャラ鳴つた。女中に手を曳れて人込におど／＼しながら町の片端を平生の服装で賑はひを見物するお屋敷の子は、金ちやんや清ちやんの汗みづくなつて飛廻る姿をどんなに羨しくも悲しくも見送つたらう。

やがて祭が終つても柳屋の店先はお祭の話ばかりだつた。向ふ横町の樽神輿と衝突した子供達の功名談を如しい程勇ましいと思つた。若衆の間に評判される踊屋臺にお鶴が出たと云ふ事は限りなく美しいものに憧るゝ私の心を喜ばせたと共に自分がそれを見なかつた口惜しさもいかに深いものであつたらう。けれども私は直ぐさま我が羨望の的だつた繪雙紙屋の店先の瀧夜叉姫の一枚繪をお鶴と結び付てしまつた。お鶴の膝に抱れながら私は聞いた。

「お鶴さんは踊屋臺に出て何をしたの。」

「何だつたらう。當て御覽。」

「瀧夜叉かい。」

「エ、何故。」

「だつて瀧夜叉が一番いへんだもの。」

お鶴は嬉しさうに笑つて又頬擦をするのだつた。眞實にお鶴が瀧夜叉姫になつたのか如何か。私の云ふまゝに、良い加減に左様だと答へたものなのか私は知らないが、古い錦繪の瀧夜叉姫と踊屋臺に立つたお鶴とは全く同一だつたやうに思はれて、踊屋臺を見なかつたにも拘はらず二十年後の今も私はまさまじと美しい繪にしてそれを見る事が出来る。

土用の中は海に近い南の濱邊で暮した。一時として静まらぬ海の不思議が既に子供心を奪つて了つたので私は物欲い心持を知らずに過ぎた。けれども海岸の防風林にも無情い風が日に／＼吹きつり別荘町も淋しくなる八月の末には都へ歸らなければならなかつた。歸つた當座は佳駟た我家も何だか物珍しく思はれたが夏の縁に常よりも一層暗くなつた室の中に大人のやうにぐ／＼と晝寝する辛棒も出来ないの私は又久し振で町をおとづれた。木蔭の少ない町中は瓦屋根にキラ／＼と残暑が光つて龜裂の出来た往來は通廊のした後のやうに時々一人として行人の影を止めないで森閑として了ふ。柳屋の店先に立つた私を迎へたのは、店棚の陰に白い團扇を手にして坐つて居た清ちやんの姉さん一人だつた。

「マア暫振りねえ。何處へ行つていらしつたの。其様に日に焼けて。」

娘はニコ／＼して私を店に腰掛けさせ團扇で搦ながら話掛けた。

「誰も居ないのかい。清ちやんも。」

「エ、今しがた皆で蟬を取るつて崖へ行つたやうですよ。」

「誰も来ないのかなあ。」

満らなさうに私は繰返して云つた。

「誰もつて誰さ。ア、解つた。坊ちやんの仲よしのお鶴さんでせう。坊ちやんはお鶴さんでなくつちやいけなさんだわえ。私ともちつと仲よしにおなりな。」

娘は面白さうに笑つた。

夕食の後、家内の者は團扇を手に縁端で涼んで居る内、こつそりと私は未だ明い町へ拔出した。早くも燈火のついた柳屋の店先にはもう二三人若者が集つて居た。子供達は私を珍しがつて種々と海邊の話を聞きたがつたがそれにも飽ると餓鬼大將の金ちやんを眞先に満ちやん迄も口を揃へて、

「お尻の用心御用心。」

とお互同志で着物の裾を捲り合つてキヤッ／＼と悪戯を始めたが了ひには止め度がなくなつてお使にやられる通りすがりの見も知らぬ子のお尻を捲つてピチャ／＼と平手で叩いて泣かせる、若者は面白づくに嗤しかける。私は店先に腰かけて黙つて見て居たが小さな女の子までも同じ憂目に逢つてワアツと泣いて行くのを可哀さうに思つた。

間もなく町は灯になつて見る間にあわたゞしく日が沈めば何處からともなく暮初て坂の上のほんのり片明りした空に星がチロリ／＼と現はれて烟草屋の柳に涼しい風の渡る夏の夜となる。

「お尻の用心御用心。」

と調子付いた子供の聲は益々高くなつてゆく。

「オイ／＼彼處へ来たのはお鶴ちゃんだらう。」

斯う云つた若者の一人は清ちやんの姉さんが止めるのも聞かずに、面白がる仲間によれ／＼と云はれて子供達に命令けた。

「誰でもいいからお鶴ちゃんの着物を捲つたら氷水をおこるぜ。」

流石に金ちやんは姉の事とて承知しなかつたが車屋の鐵公はデラ／＼笑ひながら電信柱の後に隠れる。私は息を殺してお鶴の爲に胸を波打たせた。夜目に際立つて白い浴衣のすなりとした姿をチラ／＼と店灯に浮上らせてお鶴は何時もの通り蓮葉に日和下駄をカラコロと鳴してやつて来る。やり過して地びたを這つて後へ廻つた鐵公の手がお鶴の裾にかゝつたかと思ふと紅が繖つて高く捲れた着物から眞白な脛が見えた。同時に振返つたお鶴は鐵公の頭をピシャ／＼と平手でひつばたいてクルリと踵をかへすと元來た方へカラコロとやがて横町の闇に消えてしまつた。氣を吞まれた若者は白けた顔を見合せてをかしくもななく笑つた。私は強い味方を持てる氣強さと漣波叉のやうに凄いきつた。程美しい我がお鶴を堪らなく嬉しく懷しく思つたのであつたが待設けた人に逢はれぬ本意なきに未だ崩れない集りを抜けて歸つた。

暗闇の多い坂上の屋敷町は、私をして若い女や子供が一人で夜歩きすると何處からか出て來て生血を吸ふと云ふ野衾の話を想起させた。その話をして聞かせた乳母の里でも村一番の美しい娘が人に逢ひ度いとて闇夜に家を拔出して鎮守の森で待つて居る内に野衾に血を吸れて冷めなくなつて居たさうだ。氷を踏むやうな自分の足音が冷え初めた夜の町に冴え渡るのを心細く

聞くにつけ野衾が今にも出やしないかとビク／＼しながら、一人で夜歩きをした事をつく／＼悔いたのであつた。覆ひかゝつた葉柳に蒼澄んだ瓦斯燈がうすばんやりと照して居る我家の黒門は固くしまつて扉に打つた鐵鉾が魔物のやうに睨んで居た。私は重い溜戸を如何して這入る事が出来たのだつたらう。明い玄關の格子戸から家の内へ馳込むと中の間から飛んで出て來た乳母は緊りと私を抱き締めた。

「新様貴方はマア何處に今頃迄遊んでいらつしやつたのです。」あれ程云つて置くのに何故町へ出るのかと幾度か繰返して云ひ聞かせた後、

「もう二度と町つ子なんかとお遊びになるんぢやありません乳母がお母様に叱られます。」

と私の涙を誘ふやうに掻口説くので、何時も私が云ふ事をきかないと「もう乳母は里へ歸つてしまひます」と云ふのが眞實になりはしないかと思はれて知らず／＼ホロリとして來たが、

「新次や新次や。」

と奥で呼んでいらつしやるお母様のお聲の方に私は馳出して行つた。

御屋敷の子と生れた悲哀は沁々と刻まれた。

「卑しい町の子と遊ぶと、何時の間にか自分も卑しい者になつて了つてお父様のやうな偉い人にはなれません。これからはお母様の云ふ事を聞いてお家でお遊びなさい。それでも町の子と遊び度いなら、町の子にしてしまひます。」

と云ふ母の誠を嚴かに聞かされてから私は又掟の中に囚はれ

て居なければならなかつた。暫は宅中に玩具箱をひつくり返して、數を盡して並べても「眞田三代記」や「甲越軍談」の繪本を幼い手ぶりで奪つても、陰鬱な家の空氣は遊び度い盛りの坊ちゃんを長く捕へては居られない。私は又雜草をわけ木立の中を犬のやうに潜つて崖端へ出て見はるかす町々の賑ひに果敢なく憧憬れる手となつた。

「何故御屋敷の坊ちゃんとは町つ子と遊んではいけないのだらう。」

斯う自分に尋ねて見たが如何しても解らなかつた。後年、此の時分の、解き難い謎を抱いて青空を流れる雲の行衛を見守つた遺瀾ない心持が、水のやうに湧き出して私は物の哀れを知切めると云ふ少年の頃に手飼の金絲雀の籠の戸をあけて折柄の秋の底迄も藍を湛へた青空に二羽の小鳥を放してやつた事がある。

崖に射す日光は日に日に弱つて油を焦すやうだつた蟬の音も次第に消えて行くと夏もやがて暮初めて草土手を吹く風はいとど堪へ難く悲哀を誘ふ。烈しかった丈に近く夏は肉體の疲れからも反つて身に沁みて惜まれる。木の葉も凋落する寂寥の秋が迫るに連れて癒し難き傷手に冷え／＼と風の沁むやうに何とも解らないながらも、幼心に行きて歸らぬものうら悲しさを私は沁々と知つたやうに思はれる。斯うして秋を迎へた私は果敢なくお鶴と別れなければならなかつた。

或日私は崖下の子供達の聲に誘はれて母の誠を破つて柳屋の吉先の縁臺に母よりも懐しかつたお鶴の膝に抱かれた。